# 第十六章　絶対特権

「政治家は通信社と濃厚接触しておるが、スマホを通じてのサービスじゃない特別なサービスを受けておる」

テレビ画面に総理と官房長官がお互いのガラ携を見せっこして談笑する映像が流れる。

「微笑ましいじゃないですか」

田中が大家を慰める。

「わしもスマホに変えずにガラ携のままにしておけばよかった」

「それより公務員には仕事の取説というのかマニュアルがないようですね。総理の成長戦略で経済成長率を高く見せかけるように様々な統計をごまかしてその基となる資料を破棄します。」

「田中さん。取説は存在しておる」

大家の自信に満ちた意見に田中が驚く。

「まさしく『統計取説』や『資料処分取説』というのがある。これを見ろ」

山本がそれらの取説を持って微笑む。

「これは見本です。通常『事務提要』と呼ばれる事務マニュアルがあるのですが、別途文書化されていないマニュアルがあります。それが大家さんのおっしゃる『統計取説』や『資料処理

取説』です。頭がいい官僚や官僚候補生のキャリア公務員たちは暗記しているので国民にはこの取説が見えません。そこであえて文書化しました」

内容を見てみると統計改ざんの仕方や資料を破棄したことにする方法などかなり詳しく説明されている。

大家も田中も首を傾げる。テレビの中の山本が取説を二人の目の前に差し出すと表題を読む。

「忖度？　『忖度の仕方』！」

大家が口から泡を出して倒れる。

＊

「忖度する方はもちろん、される方も強力な特権を持っています」

「どういうこと？」

「具体的に説明しましょう」

山本の表情が険しくなる。

「統計を改ざんして経済成長率を見た目より高くします」

「総理の経済政策の効果を化粧するのか」

「化粧の方法は公表しません。ひょっとしたら整形手術かも知れません」

田中は美人の山本の顔をしげしげと見つめる。

「美しすぎる」

「え？　何か言いました？」
「いえ、何にも」
田中が何とか凌ぐ。
「当然総理は喜びます。と言うより指示していたのかも知れません」
田中が即座に反論する。
「絶対指示はしない。それとなしに雰囲気というか風を送るだけ」
「忖度じゃな。官僚は化粧担当……なんとか言うな。役者に化粧をする人のことを」
「メイクさんのことですね」
「役者じゃなく役所がメイクするのか」
「なるほど」

＊

「芸能の世界ではメイクさんは裏方です。政治の世界でもメイクさんも裏方ですが、事件が発覚するとメイクさんは叱責される役に回り、今度は上司や長官、場合によっては事務方トップの事務次官がメイク役になります」
この山本の解説に田中が突っ込む。
「メイク役？　ごまかし役……と言うよりはとぼけ役でしょ。『知らない』『存じあげません』『記憶にありません』『重要性を認識していなかった』『すでに資料は破棄されていて事実関

係が分かりません』『記録が残っていない』『転勤しました』『退職していて公務員ではありません』

山本が感心する。

「まったくそのとおりです」

まだあると田中が意気込む。

『『どの時点から誰の指示で行ったかという点について確認できない』とも言う。要は自分の身体の一部なのにいつからどこが痛くなったのか分からないという。それなら慢性の疾患なのに『急に腹が痛くなった』と急性疾患だと主張する。だからかかり付けの医者に診てもらうという」

大家が介入する。

「かかり付け医？」

山本が答える。

「第三者委員会のことね」

「そうです。政府機関にいた元検事。その検事と同じ釜の飯を食った元裁判官や弁護士。そこに統計学の本当の専門家がこの委員会に入るのか注目されます」

最近の田中の意見というか発言は下手なコメンテーターより真を突いている。

「でも第三者委員会は所轄大臣に属して自由闊達な意見を出してもらうために非公開で議事録

を残しません。議事録を残してもいいから是非委員会に参加したいと言う人をメンバーにはしません。そんな第三者委員会の結論を誰が信用するのでしょうか」

大家には山本が言いたいことを田中が代読しているように見える。やっと山本が一歩前に出る。

『第三者委員会によれば』と第三者委員会が政府に都合のいい結論を引用して所轄大臣はもちろん事務次官や幹部を擁護してうやむやにします。そして幕引きです」

大家が大昔のことを思い出す。

「日本は独裁国家じゃった。どこの多くの国でもそうじゃが、軍を掌握した者が独裁者になる。今の日本は何とかシビリアンコントロールされておるが、そのために回りくどいやり方で権力者やその取り巻きを守る。単純な独裁国家でも独裁者は自分に忖度してくれる取り巻く連中を出世させるが、そうでないものは粛正する。日本の場合、キャリア官僚は守られるがノンキャリは自殺に追い込まれたりする。要は巧みな独裁政治じゃ」

この大家の迫力ある言葉に田中はもちろん山本も震えるほどの感銘を受ける。

「まさしく自殺をした下級公務員がいた。裁判に持ち込まれてもまともな対応をしないばかりか不意打ちに損害賠償すると言って訴訟を終結させました。卑怯としか言いようがありません」

「山本さんの放送局の不思議な力を持ってしても真実を暴けないのか」

田中が迫ると山本の目から涙が流れる。大家がそんな山本に告げる。

# 第十六章　絶対特権

「政治家たちよ。仮面をかぶったまま倒れるより素顔で語れ！」

全員拳を作る。